

宰府画報

第27号

2025年7月
(令和7年)発行
太宰府市教育委員会
文化財課

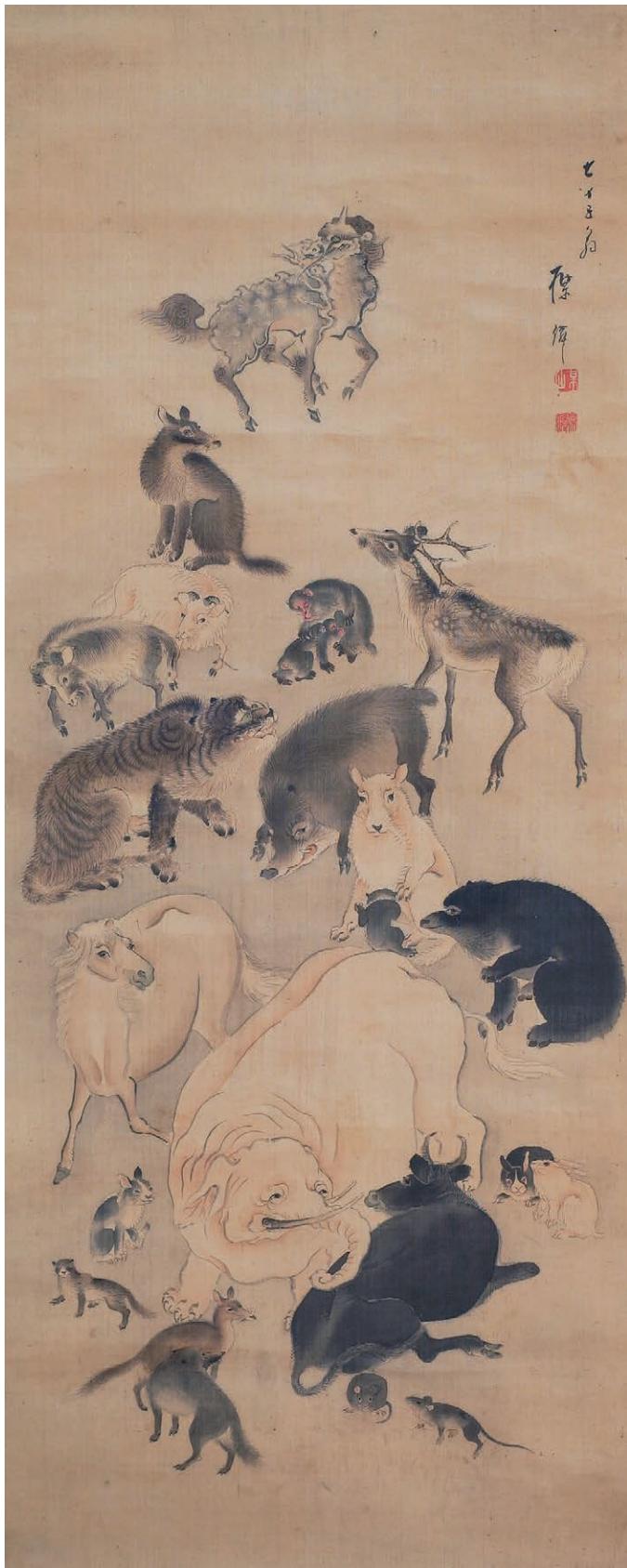
バックナンバーはこちらから

逸品探訪

吉嗣家資料

群獸図

吉嗣梅仙作



絹本著色 掛幅装 105.0 × 42.1cm 明治24年(1891)

象、牛、馬、熊、猿、猪、虎、鹿、羊、エトセトラ。動物園さながらの様々な生きものが、背景のない空間に大集合。当然ながらこれらの動物たちが自然界で一堂に会することはありえませんし、牛の手前に描かれる鼠との大きさの対比などにはずいぶんと違和感もありますが、そこは絵空事のございきよう。画面下方の動物を比較的大きく、上方では小さく描くことで奥行きや広がりを表し、向かって左側の動物は右向き、右側の動物は左向きに描くことで視点を中心寄せ、画面はお

さまりよくまとめられています。最上部に描かれるのは泰平の世に出現するという想像上の動物、麒麟。あらためて画面を見ると、動物たちは穏やかな雰囲気でまさに泰平です。この穏やかな雰囲気は動物たちが争う様子を描いていないだけではなく、丸々とした肉付きや柔らかい毛並みの表現から感じられるものであり、本作の場合は、黒目が大きくぱつちりとした眼の表現によるところも大きいと思います。

このような穏やかな表現、特徴的な眼の表現は、齋

藤秋園の動物画に見られるもので、本作の筆者吉嗣梅仙が秋園の作風にならったものとわかります。梅仙は画業初期に秋園に学び、のち諸家を学んでとくに周防出身の画家小田海仙の作風を慕つたと伝わり、吉嗣家資料には海仙画の模写を参考にして最晩年に制作された作品が現存しています。75歳の落款をもつ本作は、梅仙が秋園から小田海仙の作風へと意識を置き換えたのではなく、秋園の作風も終生慕いながら画技を磨いていたことを示すものとして貴重です。(井形栄子)

調査見聞

齋藤秋圃の作風のルーツ

—京絵師・河村文鳳との親近性—

かわむらぶんぽう

円山四条派に学ぶと伝わる

齋藤家資料調査と報告書の刊行によ

り

つて秋圃研究は大きく進展しているところですが、彼の画風形成期すなわち秋圃が上方にいた頃にどこでどのように絵を学んだのかについては、まだ研究の余地が残されています。伝記や現存作品の作風から秋圃は円山四条派を学んだとされ、確かに齋藤家資料中には応挙や吳春といった円山四条派の絵師の名を記した画稿があります。しかし資料中には狩野派や土佐派、浮世絵にならったものも散見され、これらの資料が秋圃の活動期のいつ写されたのか、また秋圃の画技との関係の深浅について検討せねばなりません。

『葵氏艶譜』と『文鳳龕画』

上方時代の秋圃については、江戸文学研究の大家であつた中野三敏氏（1935～2019）によつて様々な事蹟や人脈などが明らかにされ、初期作品のひとつである『つはものつくしのモチーフが、江戸の浮世絵師・鍬形蕙斎（1764～1824）が手がけた『略画式』という絵手本から複数サ

ンプリングされていることが指摘され、秋圃の学習の一端が知られます。



河村文鳳『文鳳龕画』（部分）寛政12年序
国会図書館デジタルコレクションより



齋藤秋圃『葵氏艶譜』（上巻）享和3年序
福岡市博物館本

さて今回は、蕙斎とは別に、河村文鳳（1779～1821）という京都の人です。43年の短い生涯だったにも関わらず絵手本の類を多く手がけて人気を博した有力者だつたと伝わります。

この文鳳の絵手本のひとつ『文鳳龕画』（寛政12年～1800年序）の中に、秋圃の出世作である『葵氏艶譜』（享和3年～1803年序）の宴席の様子を描く一図とよく似た図があり（上写真）、人物の細かな配置は異なるものの、蠟燭の炎が右上がりで細く鋭く表される点や、左手に煙管を持ってこちらを向く男性が右肩を大きくすくめる表現、また三角形の構図の中にモチーフを配置する画面構成など、いくつもの共通要素が見い出せます。

同じ絵本で競演
絵師が絵手本の
図様を相互に利用
するの珍しいことではありません
が、文鳳の絵の雰
囲気は蕙斎よりも



齋藤秋圃「花盗人図」



河村文鳳「ほうろく鼓図」

『都会帖』（部分）享和3年序
石川県立図書館デジタルコレクションより

秋圃に親近感があるようになります。秋圃の初期作品を見直していところ、『葵氏艶譜』と同年の序を持ち、秋圃の絵が収録される絵俳書（挿絵入りの俳諧本）『都會帖』に文鳳の絵もあることを再確認しました（左写真）。大坂の秋圃と京の文鳳、原画を描いた場所は異なつていただようが、ふたりが同じ時期に、近しい環境で制作活動を行つていたことが推察されるのです。

『都會帖』には秋圃と文鳳のほか、東虎、九老、白歎、壺仙、梅溪、一甫、甫尺、南浦、楠亭の、総勢11名の絵師の絵があります。人物のプロポーションや柔軟な雲囲気、対角線を意識した画面構成など、文鳳以外の絵師にも秋圃との造形感覚の共通性が感じられ、『都會帖』は上方時代の秋圃の動向や作風のルーツを探る手がかりになりそうです。（井形栄子）

いちまい
画稿鑑賞

齋藤家資料

大江山鬼退治図



紙本墨画淡彩 5枚のうち1枚 26.4×307.2cm

大江山絵巻は、平安時代の武将である源頼光が家来の渡辺綱、坂田公時らを引き連れ、都から女性を誘拐する悪事を働いていた酒呑童子を退治するという架空の物語を描いたものです。最

も有名な作例は、室町時代の制作で重要文化財の狩野元信筆『酒呑童子絵巻』3巻(サントリー美術館所蔵。以下、元信本)で、この作品から派生した模本や作品が多々存在します。

本画稿も、図様としては元信本の系統にあたるもので、貼り継いだ横長の和紙5枚に、元信本の上・中巻の絵が十数場面写されています。今回掲載しているのは、山伏の格好をして酒呑童子の住処を訪ねた頼光一行が、童子を退治するために毒酒を飲ませ泥酔させようとする場面です。扇をもち舞い踊り、童子の大杯に酌をし宴席を盛り上げる頼光一行。周囲を童子の家来である異形の鬼たちが取り囲んでいるさまからは、奇怪な屋敷の様子がうかがえます。(日野綾子)

メイショ
メイブツ

中島神社の石碑と鳥居

と刻まれており、この石碑が文人吉嗣鼓山の書であることが分かります。

また、石段を登った先の鳥居には石碑と同じ書体で「昭和廿九年参月吉日」(1954)7月に分靈分社されました。回廊東から中島神社に行く途中には石段があり、その脇に「菫祖中島神社」と彫られた石碑があります。側面には「昭和廿九年七月廿二日告成／吉嗣鼓山書」

と刻まれており、この石碑が文人吉嗣鼓山の書であることが分かります。

また、石段を登った先の鳥居には石碑と同じ書体で「昭和廿九年参月吉日」(1954)7月に分靈分社されました。回廊東から中島神社に行く途中には石段があり、その脇に「菫祖中島神社」と彫られた石碑があります。側面には「昭和廿九年七月廿二日告成／吉嗣鼓山書」と刻まれており、この石碑が文人吉嗣鼓山の書であることが分かります。

太宰府天満宮の隣に居を構えていた吉嗣家は、境内で展覧会や揮毫をするなど天満宮と深い繋がりを持つていました。多くの作品を遺した吉嗣家の足跡をここにも見ることができます。(木村純也)



「菫祖中島神社」と彫られた石碑



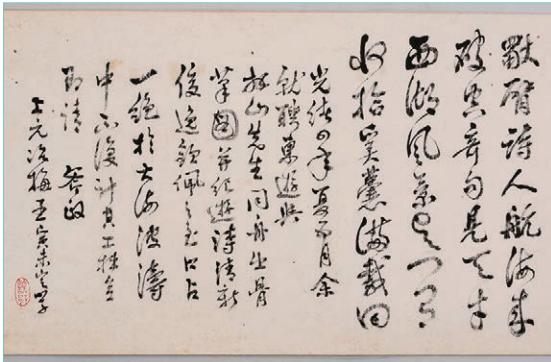
石段を登った先にある鳥居

プロフィール

清末の画家。名は寅、字は治梅。

名鑑 関係者 Vol.7

生没年
道光9～不明
(1829～?)
吉嗣家
関係者



1

〈骨筆題詠〉部分図 吉嗣家資料

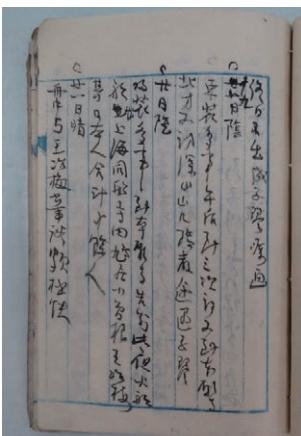


図2 『日間些事記』 吉嗣家資料

本へも渡航しており、その来日は3度に及んだ。

本へも渡航しており、その来日は3度に及んだ。

（一八七八）三月のことでした。『日間些事記』によると、拜山は上海に入ると早速に、上海で活躍していた文人たちと交遊しています。そのなかに錢子琴・陳子逸・馮耕三とともに王治梅の名前もみえます。治梅は明治10年に、日本に最初の渡航をしていましたが、病を得て上海にもどつていたのです。

明治11年6月、治梅は拝山が帰国する船に同乗して、2度目の来日を果たします。その船中で拝山の骨筆、清国滞在中の漢詩を覽じて、漢詩を詠んでいます（図1）。拝山はこの時の様子を先の日記に「舟中に王治梅と筆談す。頗る快を極む。」（図2）と記しております。（重松敏彦）

と山の上に月が輝いている様子を表現したものです。

ひとこと
くずし字

【猛虎 一声山月高】

印を紹介します。「猛虎」／声／山

印面に彫られた虎は、猫と見間違えるほど可愛らしいですが、意味を知ると、天に向かって吠える虎の猛々しい様子が伝わってきます。



見えます

です。（木村純也）

印面	2・1×1・9 cm
総高	3・0 cm
材質	水晶
吉嗣家資料	



編集後記

●偶然ですが、動物（群獣図）に始まり、動物（虎）に終わる回でした。次回は期待の新物登場。乞うご期待（木）

空調が壊れて灼熱地獄の調査室。在宅仕事は涼しいけれどナギ上りの電気代。“前門の虎と後門の狼”と鬪っています。(井)